

大和の文化遺産を学ぶ ⑨

—天理参考館の収蔵資料を活用した唐古・鍵遺跡の再評価

天理大学文学部教授
桑原 久男 Hisao Kuwabara

令和2年(2020年)10月24日～12月6日、田原本町の唐古・鍵考古学ミュージアムでは、コロナ禍のために延期されていた企画展「よみがえる弥生の祭場—唐古・鍵遺跡と清水風遺跡—」が満を持して開催された。清水風遺跡や県内の各遺跡から出土した絵画土器等が一堂に集まったのは壮観で、弥生人が土器の器面に描いた数々の線刻画に目を奪われた。それとは別に注目されたのが、第Ⅱ部「唐古・鍵遺跡採集品里帰り展—飯田氏と森本六爾の所蔵資料—」として、天理大学附属天理参考館が所蔵する土器や石器などの資料が展示されていたことだった。

天理参考館が常設展示をしている唐古・鍵遺跡の絵画土器片は、私も授業等で活用をしている見慣れた資料だが、それ以外の土器片や石器類ははじめて目にするものだった。これらの資料は、遺跡近く

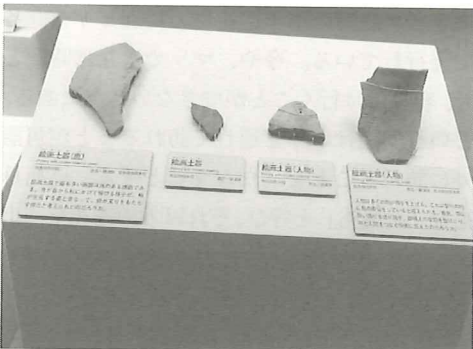


写真1 飯田親子が採集した絵画土器
(天理参考館)

にお住まいだった飯田松次郎・恒男親子が明治年間から昭和初期にかけて拾い集めていたものが、戦後になり、参考館の収蔵資料となつたらしい。飯田親子が

昭和4年(1929年)に刊行した『大和唐古石器時代遺物図集』には、採集遺物の一部が紹介されているが、天理参考館の資料にはその図集に掲載された写真と照合できるものがあるようだ。企画展の開催に携わった藤田三郎氏(田原本町文化財保存課主幹・埋蔵文化財センター長)に事情を尋ねると、資料借り出しの作業をとおして、天理大学附属天理参考館には、飯田親子が唐古・鍵遺跡で採集した石鏃など約1,000点の資料が収蔵されていることがわかったとの話であった。とくに重要な飯蛸壺^{いいでこつぼ}は、唐古・鍵遺跡の交易圏の広さを示しているという。藤田氏によれば、これらの資料は唐古・鍵遺跡の奥深さを示す重要なもので、今後、全容の把握と詳細な調査研究を行い、その成果を公開・活用することが望まれるとのことであった。

折しも、令和2年(2020年)8月、天理大学と田原本町は、健康で活力ある社会の実現をめざすことを目的として、「包括的連携に関する協定書」を締結したところであった。協定書では、連携協力事項として、健康づくりに係る活動のほか、「地域コミュニティ活性化に関すること」「学術研究に関すること」などが含まれ、唐古・鍵遺跡の調査研究や保存・活用などの分野においても、天理大学が保有する知的・人的資源を活用してゆく方向性が示されていた。そこで、この協定を踏まえて、関係者が協議をおこない、「天理大学附属天理参考館収蔵資料を活用した唐古・鍵遺跡の歴史的・社会的価値の再評価」と題した共同研究を企画することとなった。共同研究には、田原本町の職員、天理大学の教員、天理大学附属天理参考館の学芸員、その他関係者がメンバーとして参加し、天理参考館収蔵の「飯田コレクション」について、それぞれの役割分担に応じて調査研究を行いながら、資料の

全体像を把握し、目録を作成する作業を進めてゆく方針となった。

天理大学・天理参考館・田原本町の三者によるこの共同研究は、幸いにも、県内の関係機関等と共通で設定した課題の解決を目的とした研究として、天理大学学術・研究・教育活動助成(地域課題研究助成)に採択され、令和3年(2021年)4月、研究活動が開始された。第1回打ち合わせ会(4月23日)では、天理参考館学芸員の藤原郁代氏が「飯田コレクション」の概要を説明し、第1回研究会(6月3日)では、藤田氏が、「唐古・鍵遺跡における飯田コレクションの意義」と題した報告をおこなった。

藤田氏の報告によると、明治34年(1901年)、唐古・鍵遺跡を初めて学界で紹介したのは高橋健自氏(当時は畝傍中学校教員)だったが、その高橋氏に遺物の存在を教えたのが飯田隆蔵氏だった。大正6年(1917年)、鳥居龍蔵氏による現地調査を大阪毎日新聞が大きく報じたことを契機に、森本六爾、梅原末治などの考古学者が次々に飯田氏のもとを訪れた。大正12年(1923年)3月、大和史学会が高田高等女学校で開催した上代遺物展覧会では、森本六爾氏のコーディネートで飯田氏の採集遺物が出品され、同年から翌大正13年(1924年)にかけて、梅原末治、森本六爾の両名が競うように飯田氏の採集資料を学会誌に紹介したことで、唐古遺跡(唐古・鍵遺跡の旧称)の重要性が広く全国的に知られてゆく。飯田氏の採集資料に絵画土器や銅鏃1点が含まれていたことが、近畿地方の弥生時代に対する認識を改めたのだ。昭和4年(1929年)の『大和唐古石器時代遺物図集』では、弥生土器57点、打製石器29点、磨製石器15点、石製品12点、土製品2点、金属器1点など、合計137点の採集遺物が網羅的に記載されたほか、遺物の散布範囲が唐古池を中心に東西440m、南北650mに及ぶとして、遺跡の広がりに対する認識が示されていることが興味深い。

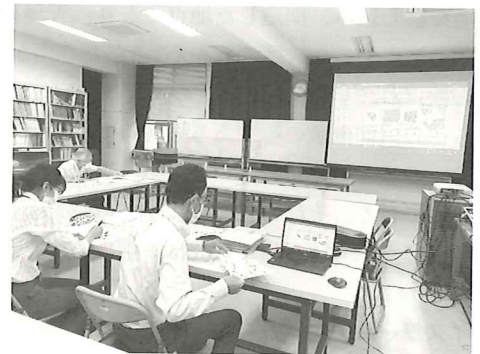


写真2 オンラインを併用した
第1回研究会の会場風景

藤田氏によるこれまでの検討により、大正年間に梅原・森本の両名が報告した土器の実物が天理参考館の「飯田コレクション」に含まれていることが判明している。共同研究では、今後、「飯田コレクション」の目録作成に取りかかり、『図集』に記載された遺物との正確な照合を行う必要がある。多年にわたって遺物を採集した飯田親子の活動が、唐古・鍵遺跡のみならず、弥生時代の研究に大きな役割を果たしたことは、当地における近代の歴史の一コマとしても重要だ。平成29年(2017年)、遺跡の現地は史跡公園に生まれ変わり、市民の憩いの場として活用されている。今回の共同研究が、唐古・鍵遺跡の「弥生力」を地域文化として活かすという史跡公園の活用基本方針に寄与するものになることをめざしたい。